



英文学会通信

第124号

— 日本大学英文学会 —



発行：日本大学英文学会

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部英文学研究室内

Tel. : 03-5317-9709

E-mail : esanu02@gmail.com

《ご挨拶》

副会長挨拶 日本大学英文学会副会長 松山 博樹 2

《特別講演報告》

特別講演会のご報告 日本大学文理学部准教授 前島 洋平 3

《エッセイ》

残りの大学生活 日本大学文理学部英文学科4年 東海林真菜 4

My Experience in Japan 日本大学大学院博士後期課程1年 カヒナ・アイムール 4

就職活動への向き合い方 日本大学文理学部英文学科卒業生 近藤千彩乃 5

恩送り 日本大学危機管理学部助教 岡 麟太郎 6

《検定試験奨学制度》

英語学習の幅を広げる 日本大学文理学部英文学科4年 奥家 遼斗 7

大学生活を通して得た学びと成長 日本大学文理学部英文学科2年 濱田 優子 7

《海外留学体験記》

短期留学で広がった世界と私の成長 日本大学文理学部英文学科3年 富沢 祐衣 8

ケント大学語学研修体験記 日本大学文理学部英文学科3年 牛山 弥月 9

《新刊書案内》

『人種と民族を考える十二章—英米文学・文化・教育の視点から』（音羽書房鶴見書店、2025年）
..... 日本大学文理学部教授 閑田 朋子 11

《年次大会プログラム》

《年次大会発表要旨》

ファンタジーという名の教育—『オズの魔法使い』と新たな楽園の創造—
..... 日本大学文理学部准教授 堀切 大史 12

権力の限界—個人・社会・倫理の交錯する場としてのシェイクスピア劇
..... 日本大学法学部教授 松山 博樹 13

セット形成による構造構築の可能性：制限的關係節を事例に
..... 日本大学文理学部准教授 高橋 洋平 13

〈最終講義〉文文化研究と私：木を見て森を見る研究をめざして
..... 日本大学文理学部教授 保坂 道雄 14

《月例会関連》

《訃報》

《事務局だより》



ご挨拶申し上げます

日本大学英文学会副会長 松山 博樹

このたび、副会長を務めることとなりました法学部の松山博樹です。大きな責任を担う立場を拝命し、身の引き締まる思いでおります。会長をはじめ、運営委員・常任委員の先生方と力を合わせ、学会の発展に少しでも寄与できるよう尽力してまいります。まずは、研究会員・同窓会員・学生会員の皆様が日々学会を支えてくださっていることに、心より御礼申し上げます。

本学会はいま、会員数の減少という避けては通れない課題に直面しています。大学院生や若手研究者の減少には、人口動態や経済状況といった社会的要因が大きく関わっていることは否めません。しかし、ただ手をこまねいているのではなく、わたしたち自身が主体的に働きかけることで状況を変えることも可能だと信じています。学会に参加して研究の楽しさを実感することは、学生にとって何ものにも代えがたい経験となり、将来研究を志す契機にもなります。学会を「研究の魅力を分かち合う場」と位置づけ、若い世代が自然に足を運びやすい環境づくりにも取り組んでいきたいと考えております。

その一例としては、学生会員の参加の機会を拡充すること、またSNSやオンラインを活用した情報発信を一層充実させることが挙げられます。すでに立ち上げられたInstagramは、学生に学会を身近に感じてもらおうとたいへん意義深い取り組みです。これを起点として、学会が「閉じられた場」ではなく「開かれた学びの共同体」として認識されるよう、広報活動をさらに展開してまいりたいと存じます。こうした努力の積み重ねこそが、会員数減少という課題に歯止めをかける力になると確信しております。

さらに、2026年には英文学科創設100周年を迎えます。この記念事業として予定されている記念大会や記念論文集の刊行は、これまでの歩みを振り返ると同時に、新たな未来を築く契機となるはずです。記念論文集に多くの先生方ご参加くだされば、研究の幅広さを示すとともに、次の100年に向けた力を世代を超えて共有できるでしょう。この節目を「過去と未来を結ぶ架け橋」として位置づけたいと考えております。

シェイクスピアは400年以上前の劇作家でありながら、世代を超えて、今もなおわたしたちに新しい視点を与え続けています。『テンペスト』には「過去は序章にすぎない (What's past is prologue)」という言葉があ

ります。本学科と本学会がこれまで積み重ねてきた100年の歩みも、次なる100年に向けた新たな出発点にほかなりません。この言葉を胸に刻みつつ、学会の未来を皆様と共に考えてまいりたいと思います。これまでの100年を次の100年への礎とし、本学会がさらに豊かで実りある共同体へと発展していくことを願ってやみません。

最後になりましたが、これまで学会を支えてこられた諸先生方に深く感謝申し上げます。そして、今後の運営には会員一人ひとりのお力添えが欠かせません。わたし自身まだ未熟ではございますが、誠心誠意努めてまいりますので、今後ともご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



《特別講演報告》

特別講演会のご報告

日本大学文理学部准教授 前島 洋平

ジェイン・オースティン (1775-1817) の人気は 2025 年に生誕 250 年を迎え、さらに過熱の一途をたどっている。本国イギリスではオースティンゆかりの地で数々のイベントが行われ、いっぽう海を渡ったアメリカでは、この原稿執筆時の 9 月 26 日に NBC News がその様子を詳細に報じている (<https://www.nbcnews.com/world/united-kingdom/jane-austen-pride-prejudice-anniversary-bennet-darcy-celebration-rcna232400>)。この流れで言えば、新井潤美先生 (東京大学大学院人文社会系研究科教授) をお迎えして、「The Janeites—ジェイン・オースティンの受容の変化」という特別講演会を本学会が行なったのは、まさに時宜にかなった機会だったと言えるかもしれない。

新井先生については、『不機嫌なメアリー・ポピンズ—イギリス小説と映画から読む「階級」』(平凡社, 2005 年)、『ノブレス・オブリージュ イギリスの上流階級』(白水社, 2021 年) などのイギリスの階級制度に関するご著書、あるいは『自負と偏見のイギリス文化—J・オースティンの世界』(岩波書店, 2008 年)、『マンスフィールド・パーク』(岩波文庫, 2021 年) といったオースティン関連の文化論や翻訳で馴染みのある会員も多いに違いない。要するに、現代の日本におけるオースティン研究の第一人者であり、この特別講演会への期待が高まるのも当然だった。

当日の参加者が百人を超える熱気のなか、オースティンの小説 6 作に関する説明で講演が始まった。ここでは、とくに印象に残った 3 点について触れる。まず、本国イギリスにおけるオースティン (作品) の位置づけが「学校で習うもの」から「面白く、楽しく読むもの」へと最近 50 年で変化したという指摘である。きっかけは、1990 年代の映像化作品が爆発的な人気を博したことにある。なかでも、1995 年の BBC 版 (主演はコリン・ファース) に関連して、男性主人公のダーシーが濡れた白いシャツ姿で登場する名場面を記念した像が一時期オーストラリアのメルボルンに設置されていたというエピソードは、この映画の人気の高さを示すものとして印象深い。

また、文学者/評論家のあいだでオースティンへの評価が分かれた点についても興味を持った。『ジェイン・オースティンの肖像』の著者デイヴィッド・セシル (1902-1986) や、E・M・フォスター (1879-1970) らのいわゆる “The Janeite(s)” (ジェイン・オースティン讃美者) に対して、ヴァージニア・ウルフ

(1882-1941) が自身のエッセイ「六十歳のジェイン・オースティン」の中で揶揄したこと、さらにはアメリカの作家マーク・トウェイン (1835-1910) は大のジェイン・オースティン嫌いであったことなど、具体的なエピソードを交えた新井先生のご講演は多くの参加者の関心を引いたに違いない (私もその一人である)。

日本におけるジェイン・オースティンの受容という点では、ラフカディオ・ハーン (1850-1904) の影響を無視することはできない。1896 年から 1903 年まで東京帝国大学で英文学を講じたハーンの影響によって、オースティン文学は難しいと学生たちが思い込んだ可能性があるという。普段の授業で学生に原作を読むことの重要性を説く筆者にとって、この仮説が真実でないことを願いたい。学生の意欲を削ぐような言動は慎むべきと自戒の念を新たにす。話を戻すと、日本におけるオースティンの受容に関して、ハーンと夏目漱石 (1867-1916) は必読である。

最後に、特別講演会に参加した学部生を対象としたアンケート結果について報告する。計 73 名のうち講演内容に関して「とてもためになった」44 票 (60%)、「ためになった」23 票 (32%)、無記入 6 票 (8%) であった。また、今後同種の講演会で聞いてみたい内容については、ジェイン・オースティンの作品論や他の作家への影響のほか、英語文学の他の作家も取り上げてほしいという希望が多かった。これらの学生の声を今後の授業や講演会でどのように生かしていくか、検討したい。また、当日の準備に携わってくださった方々にこの場を借りてお礼を申し上げる。有難うございました。

註

本文で触れたウルフのエッセイは YouTube で読むことができる (VIRGINIA WOOLF on JANE AUSTEN'S writing style—Persuasion & novels Austen might have written ANALYSIS)。



《エッセイ》

残りの大学生活

日本大学文理学部英文学科4年 東海林 真菜

私は6月末に大学院の入試を終え、無事に合格し、来年の春から大学院生になります。入試には合格しましたが、筆記、口述試験を経ていかに自分が未熟なのが改めて分かりました。英語でのコミュニケーションや専門知識など、まだまだ勉強していかなければならないと感じました。そのため、私は初心に帰って英単語を覚え直したり、英検やTOEICといった資格の勉強により力を入れたり、英語を学び直しています。英会話は実際に接客のアルバイトで用いることがあるので、自分の考えを英語で表現できるように語彙力を上げて、接客で実践しています。忘れていた単語、熟語も多く、もっと頑張らなければならないと思う日々です。そして、卒業までに資格も得られるように頑張っています。

また、今年の前学期から大学院の先取り授業で古英語を読んでいるのですが、難易度も大学の授業より難しくなっており、まだまだ学ぶことがあると感じました。そもそも古英語を実際に細かく読むということは2年生の時に履修した英語史でもやらなかったため、この授業で初めて触れることができました。大学院の先輩方の授業の姿勢を見て、自分の未熟さも強く感じますが、毎回の授業で得られることも多く、楽しく学ぶことができています。今は授業だけで手一杯ですが、大学院では、古英語の完了形を研究したいと考えているので、古英語に慣れていろいろな資料を読めるように頑張っています。現在大学院の授業は1つだけ受けていますが、来年は色々な授業を受けられるので、大学院生として本格的に学べるのが楽しみです。

ここまで、大学院に向けて頑張っていることを挙げましたが、卒業論文も完成に向けて励んでいます。私は完了形の発達について、欽定訳聖書と現代訳聖書を比較して研究しています。be完了形(自動詞で使われる完了形)を主に考察していることと考えているのですが、言語資料の分析中で気になったことがありました。be完了形は、現代ではほとんど使われていないものの、comeでは使われることがあるということ、先行研究で使用した資料に書かれていました。しかし、実際に分析をしたところ、近代英語でbe完了形と使われていたcomeは、現代英語ではbe完了形ではなく、have完了形や過去時制に取って代わられていました。先行研究で見たこととは異なった結果が出ており、なぜこのような結果になったのかを深掘りして

いきたいと思いました。また、comeがhave完了で使われている場合もあったので、これはなぜなのかと疑問に思ったため、こちらも追求していきたいと考えています。研究を進めていくうちに、いろいろなことに對し疑問が生じ、これからさらに大変になると思いますが、卒業論文完成に向けて研究を着々と進めていきたいです。

残りの大学生活も、卒業論文やこれからの大学院での勉強に向けて日々精進していきます。そして、勉強だけでなく、アルバイトも家事も同じくらい頑張りたいと思います。



My Experience in Japan

First-year doctoral student, Nihon University Kahina Aimeur

My name is Kahina, and I come from Algeria, a country thousands of kilometers away from Japan and shaped by a very different culture and lifestyle. When I packed my bags for Japan, I did not know what to expect about daily life or studies. I was the first in my surroundings to travel this far, and while my family and friends were worried, I felt huge excitement. I was certain that living and studying in Japan would help me grow not only academically but also personally. When I set foot in Japan in April 2024, I couldn't believe that what I had long seen only in media was suddenly right in front of me, down to the smallest details.

The first days were not easy, though. The language barrier made even small tasks, like shopping or asking for directions, feel challenging. As a picky eater, food was another difficulty. Meals that seemed simple for everyone else often left me unsure about their ingredients. Still, what could have been discouraging was eased by the kindness of the people around me: international student communities online, classmates and staff members at Nihon University, people in my dormitory, and even strangers. I will never forget the classmate who gave me an omamori for luck in my studies before my entrance exam. I did not believe in lucky charms, but his gesture of kindness is something I will always treasure.

Academically, I found something very different from what I was used to in my home country. Back home, classroom environment was characterized by a strong barrier between students and teachers, leaving little

room for discussion. I thought Japan, with its reputation for formality, would be even more rigid. To my surprise, the reality was the opposite. Classrooms encouraged discussion, and students were free to share their opinions. The opportunity to interact not only with Japanese professors but also with visiting scholars from abroad has been invaluable to me. What impressed me the most was their dedication to their field. Seeing the scholars speak with such energy about their fields inspired me to study with the same dedication.

One regret I carry is not dedicating enough time to learning Japanese, as my studies kept me busy. Still, I try to learn little by little; from classmates, from daily encounters, and even from signs and announcements on trains. Every little bit of Japanese I pick up gives me a small sense of accomplishment, reminding me that language is indeed the key to fully understanding a culture. Even with limited Japanese, people around me were always eager to share about Japanese culture and answer my endless questions. One of my most memorable experiences was visiting Kamakura with my classmates. They acted as wonderful guides, introducing me to popular street food, taking me to temples, shrines, and other sites I would not have discovered alone. Their enthusiasm to teach me about Japanese culture made me feel welcome and included.

I was also fortunate to live in a very local area of Tokyo, where there are few foreigners. This allowed me to observe Japanese manners and daily life closely and learn from them naturally. At the same time, whenever I longed for an international atmosphere, I could take a short ride to Shibuya, experiencing the busy, cosmopolitan side of the city.

Even if I happen to leave Japan in the future, I know I will carry with me more than just the lessons of the classroom or the beauty of the culture. I will remember the little things that became part of my daily life: the constant song of cicadas through summer days, the bird that chirps when it is safe to cross the street, and the cheerful melody of the trash truck in the morning.



就職活動への向き合い方

日本大学文理学部英文学科卒業生 近藤 千彩乃

この度は、就職活動における準備や動機等、後輩の皆さんに少しでも何か就職活動について、参考になる点があればと思い、執筆させていただいています。これから書くことは、就職活動の実際の取り組み、準備(留学)、内定をいただいた航空管制官の試験の内容になります。

まず、就職活動の準備、留学についてです。私が1、2年時はコロナ禍だったのもあり、学内で海外に渡航することを禁止されていた時期でした。3年になり大学に対面で通うようになりましたが、留学という選択自体を、半ばあきらめていました。3年時から就職活動も始めていましたし、留学に行くことで、同年代の学生たちに後れを取るような気がしていました。しかし、どうしてもあきらめられないという思いもあり、休学をしてニュージーランドへ語学留学することにしました。管制官になりたいというのは、高校のころから思い描いていたものであり、そのために英文学科に入ったので、英語を学習するうえで、やはり留学に行っておきたいという思いもありました。今になって思うと、ここで決断ができて、本当によかったと思います。就職活動において、私は民間企業も受けていたのですが、ワーキングホリデーや語学留学で、一年卒業が先延ばしになっても、気にする企業はほとんどありませんでした。気にするとしたら、何をやったのか、どんな成果を自分の中で挙げたのか、何を得たのか、これらをきちんと自分の言葉で説明できれば、むしろ自身の長所としてアピールすることができたように思います。結果として私は企業にアピールできる、TOEIC 800点以上のスコアを習得し、帰国することができました。留学を迷っている方にお伝えしたいのは、どんな目的で、何を達成して帰るのかを明確にして、学生のうちに、後悔のないよう海外での生活と勉強に挑戦することは、とても価値のあることであるということです。

次に実際の就職活動についてです。私の場合は航空業界に絞ってインターンやESの提出をしていました。航空管制官の採用は公務員試験であり、筆記試験がメインなので勉強に重きを置いていたのですが、公務員であっても発言の態度や面接での姿勢はよく見られていたと思います。というのも仕事の特性上、チームで仕事をすることがほとんどで、協調性がない人間は仕事にならないからです。ここで、民間企業対策での面接練習などの就職活動が役に立ったと感じます。企業研究、業界研究、特に自己分析はこれから自分が

仕事をしていくうえでどのようなことに喜びを感じるのか、何がしたいのか、という生涯的に大事な動機付けを得ることができると感じます。

最後に、航空管制官試験の一次試験の内容についてです。一次試験の対策としては公務員試験の対策とほぼ同じでした。特徴としては英語の長文問題の比重が大きく、リスニングも難易度が高いものである点です。管制官を目指すとしたら、やはり英語の能力は必須です。英語の長文は英国のBBCニュースが過去に出典元になったことから、BBCニュースの航空関係のニュースを自分で読解し、何度も読み込んで対策をしていました。仕事では英文の公示を読み、理解し、運用する必要があるため、この一次試験ではその基礎となる読解能力が求められました。また、一次試験は一日のうちにすべて行うため、体力と、ある程度の根性が求められると思います。私も、途中でまた来年受けなければいいか、という甘い気持ちになった瞬間がありましたが、やはりあきらめたくないという気持ちで持ち直すことができましたと思います。

以上、私の留学や就職活動での体験を書かせていただきました。誰かの参考に少しでもなれば幸いです。



恩送り

日本大学危機管理学部助教 岡 麟太郎

ご縁の数々に恵まれ、2025年3月25日(火)、日本大学文理学部で執り行われた学位伝達式にて博士(文学)の学位を拝受いたしました。家族をはじめ、師である吉良文孝先生、学位論文の副査を務めてくださった保坂道雄先生・澤田治美先生、英語の校正を担当して下さったりチャード・キャラカー先生、ならびに日頃より支えてくださる多くの先生方や先輩・後輩の皆様、そして友人に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

この節目にあたり、私がここまで歩んでこられたのは「人とのご縁」に支えられてきたからだ、とあらためて実感しています。尊敬する方々と出会い、学びをいただき、励まされてきました。その繋がりのあたたかさを思うと、胸がいっぱいになります。このエッセイでは、その方々と過ごすなかで得た、学びをお話できればと思います。

今、私がとりわけ大切にしている考え方の一つに、「恩送り」があげられます。「恩返し」が受けた恩を当人に返すことであるとすれば、「恩送り」は受けた恩

を他の誰かへ送るという考え方です。正直、この言葉を知ったのはつい最近のことですが、その精神は、これまでのご縁を通じて自然と育まれてきました。

特に忘れ難いのは、私が博士後期課程3年のときのことです。学位論文を書き上げるために在学延長を家族に願いと、家族は「全力で挑戦してきなさい、他のことは何も心配はいらないよ」と背中を押してくれました。博士後期課程に在学している間、私は職についておらず、家族から一方的に支えられるばかりでした。だからこそ「ありがとう、この恩を必ず返せるように懸命に頑張るね」と伝えると、母は「そんなことは考えなくていいんだよ。してあげたいからしているのよ。…ただ、もし恩を感じてくれているのなら、今度は麟が自分の子どもに同じようなことをしてあげてね」と答えてくれました。この言葉は今も私の中で響き続けています。幼い頃、祖父から教わった「刻石流水」(受けた恩義は石に刻み、施したことは水に流す)の考えとも重なり、あの瞬間、私は「恩送り」の精神を腹の底から実感したのだと思います。

また、師の吉良文孝先生からは「江川先生から学んだことも私は岡君たちに伝えている。次は君の番だよ」という言葉をいただき、大学院の先生方や先輩方からも「授業で分からないことがあるのは当たり前。本気で取り組んだなら思いきり間違えていい。…いずれ後輩が同じ壁にぶつかったら、そのときは岡君が伝えてあげるんだよ」と何度も励まされました。振り返れば、私がご縁をいただいた方々には、等しく「恩送り」という生き方が一貫していたのです。

博士前期課程から後期課程修了に至る6年間の大学院生活のなかで、私はことばの世界の楽しさや考え方の豊かさを学び、そして何よりもかけがえのないご縁を授かりました。今もおお未熟な身ではありますが、「恩送り」ができるようにこれからも精進してまいります。家族が私へ、師が私へ、先生方や先輩方そして友人が私へ託して下さったように、私もまた誰かを支え託すことで、ここまで導き育てて下さった方々へのご恩に報いていきたいです。そうして重ねる「恩送り」が、めぐりめぐって「恩返し」となることを信じています。



《検定試験奨学制度》

英語学習の幅を広げる

日本大学文理学部英文学科4年 奥家 遼斗

この度、TOEICのスコアをもとに検定試験奨学制度を利用させていただくとともに、「英文学会通信」への執筆の機会をいただきました奥家遼斗と申します。TOEICを受験した動機や準備、受験を通しての経験について書かせていただきます。

私がTOEICの受験を試みた理由は、将来英語を生かしたキャリアに進みたく、そのための資格として習得したいと思ったからです。しかし、英文学科に在籍しつつもお世辞にも英語が得意とは言えず、英文学科で何度か受けたTOEICのスコアもL&Rで約350点でした。この時には特にTOEICを受けたいという気持ちはありませんでしたが、英語力は伸ばしたいと思い、英語学習を始めました。始めのうちは忘れていた事項を復習するために大学受験同様に英単語や英文法の学習に取り組みました。それにより少しはTOEICの問題も解けるようになりましたが、リスニングが足を引っ張っていました。今の時代、YouTubeなど様々なアプリを使ってリスニング力を養うこともできますが、私は実際に英語話者との会話を通じて学んでみたいと思いオンライン英会話を始めました。始めは聞くことはおろか話すことも困難でしたが毎日コツコツ続けたことで少しずつリスニング力とスピーキング力を伸ばすことができましたと思っています。

そして「海外で生きた英語に触れたい」と思い、休学制度を使ってカナダに1年間のワーキングホリデーで滞在しました。この1年間では主にコミュニケーションの英語を勉強しましたが、就職活動を始めるにあたりTOEICの重要性に気づいた私は、ビジネスの英語を学びたいという思いと共に受験を決意いたしました。

私がTOEICを受けるにあたって最も意識した勉強方法は「英語を英語で学ぶ」ことです。例えば、英文のニュースを読んでいる際に出てくるわからない単語や文法をすべて英文で検索してその英語を読みながら勉強する方法です。また日常で英語に触れる回数を増やすためにスマートフォンなどの機器の言語も英語にしていました。そうすることで頭の中で日本語から英語に変換することが不要となり、英語を理解するスピードを伸ばすことができました。実際の試験対策としては、1ヶ月ほど前からTOEIC用のビジネス英単語を覚えたり、集中力を保つために本

番と同じ時間で過去問を解くなどを通して進めました。結果としてはL&Rで770点を取得しました。もちろん、まだまだスコアを伸ばすことは可能ですので引き続き精進していきたいと思っています。

TOEICは2時間と長丁場の試験に加え、点数を伸ばすことが非常に難しいですが、少しずつ勉強を進めることで必ず結果につながる試験だと思えます。あくまで私の経験談にはなりませんが、この文章を読んでいただいている方にとって少しでも参考になることができれば幸いです。



大学生活を通して得た学びと成長

日本大学文理学部英文学科2年 濱田 優子

私は現在、英検準1級の取得とTOEICのハイスコアを目指して、勉強に取り組んでいます。英検合格には、4技能を問われるため、勉強時間の確保の工夫をしています。通学中はリスニングの音声を聞いたり、英単語を覚えたりしています。また、夏休みなどの長期休暇を利用して、長文読解やリスニング問題を問いています。ライティングは、アカデミック・イングリッシュという大学の講座を受講して力がつきました。また、大学には英検準1級の取得や、TOEICでの高得点取得を目的とした講座があることを知り、受講しました。卒業に必要な単位取得と資格対策を同時に進められる点で、効率の良い講義だと思っています。さらに英語で行われる講義もあるので、スピーキング力とリスニング力を実践的に高める機会となっています。

また、大学生活で特に力を注いでいることのひとつに、サークル活動があります。私の所属するサークルは、子どもたちの心に寄り添い、勉強のサポートをしたり、一緒に遊んだり、話や悩みを聞いたりするボランティア活動を通して、子どもたちの学習支援・生活支援をしています。私は将来教師を目指しています。このサークルでの活動には子どもたちとの接し方や考え方を学べる機会があり、教育現場に必要な視点や姿勢を身につけることなど有益な経験となっています。また仮に、将来別の職業に就いたとしても、ボランティア経験やサークル活動の経験は、自身の力や自信に繋がり、社会に出た際に必ず役立つだろうと考えています。

大学に入学してから約1年半が過ぎ、私は英文学科の講義を通して、多くのことを学びました。英文学科の講義を受け、英文の書き方や、英語の成り立ち、

また外国の文学作品を読む中で文化や宗教への理解も深まりました。高校生のときに受けた英検のライティングのスコアと大学生のときに受けたスコアを比較すると、格段に上がったことが分かります。英文学科の講義が力になっていて感じました。入学前は、英文学科と聞くと「外国の本を読み、英語で話す」という漠然としたイメージしかありませんでした。しかし実際には、発音や会話力を高める授業、英文学を深く読み解く授業、映画や文化を学ぶ授業、そして英語教育を専門に扱う授業など、多角的に英語を学べる環境が整っていることを知りました。これらが必修科目として体系的に組み込まれているため、英語を幅広い角度から理解できる点は本学科ならではの魅力であると感じています。

こうした学びを通して私が得た最も大きな気づきは、英語力の向上だけではなく、「英語を学ぶこと」と「英語を教えること」は異なるという理解を深められたことです。そして英語は単なる言語ではなく、文化や歴史、教育、社会と結びついた学問であるという認識を持つようになりました。今後も資格試験の目標に向け努力を続けつつ、大学での学びとサークル活動を通して、英語と教育についての理解をさらに深めていきたいと考えています。



《海外留学体験記》

短期留学で広がった世界と私の成長

日本大学文理学部英文学科3年 富沢 祐衣

私は今回の短期留学を通じて、多くのことを学ぶことができました。もともと「人生のうちに一度は海外留学を経験したい」という強い思いがあり、今回その夢を実現できたことをとても嬉しく思っています。面接を受けた日から帰国する日まで、毎日がワクワクと発見に満ちた時間でした。この三週間で、異文化理解やコミュニケーション能力、そして英語力など、多くの新しい知識と経験を得ることができました。ニューカッスル大学では、他国からの留学生と一緒に授業を受ける機会が多く、非常に有意義な学びの場となりました。特に印象に残っているのは、サウジアラビアの学生たちとの交流です。彼らはラマダンの期間中で、日中の断食を実践していました。日本では実際に断食をしている人を見る機会が少なく、以前は「大変そうだな」という表面的な印象しか持っていませんでした。しかし、彼らの姿を間近で見ているうちに、その行動の背景にある誇りや信仰心の深さに気づき、自分がこれまで物事をどれほど表面的にしか見ていなかったかを実感しました。一方で、ニューカッスル市内のバス利用中に人種差別を受けるという経験もしました。日本では人種差別を直接経験することがほとんどなく、どこか他人事のように感じていた部分がありました。しかし、実際に差別を受けることで、その理不尽さと、世界に今なお根強く残るこの問題の深刻さを肌で感じることになりました。差別は決して他所の話ではなく、どこにでも存在し、完全に無くすことがいかに難しいかを改めて認識しました。それでも、ニューカッスルでの生活の中で、現地の人々の温かさやフレンドリーな態度に何度も救われました。ビーチでは隣に座っていた人が自然に話しかけてくれたり、カフェではわからないメニューを丁寧に説明してくれたりと、積極的なコミュニケーションに触れることができました。私が会話中に言葉に詰まってしまっても、相手が話を広げてくれる場面が多くあり、その姿勢に感化され、私自身もより主体的に交流しようという気持ちを持つようになりました。今回の短期留学は、日本大学の学生数十名と共に行動するプログラムでした。初めはほとんどが初対面で、少し緊張もありましたが、三週間で共に過ごす中で次第にお互いを知り、仲を深めることができました。特に印象的だったのは、私がギックリ腰になってしまった時の出来事です。動くのがつらかった私に、友人が食事を運んでくれ

たり、気遣って声をかけてくれたりと、温かい優しさに触れることができ、とても心が癒されました。このような支え合いの経験は、短期留学の中でも特に忘れられない思い出の一つです。また、現地の人々の生きた表現や美しい発音を間近で聞くことで、自分の英語力にも大きな変化がありました。日々の会話の中でそれらを意識的に取り入れ、発音にも気を配ることで、英語を話す力が着実に伸びていることを実感しています。

今回の研修で得た学びを、今後の大学での講義や、ディズニーでのアルバイトに活かしていきたいと思っています。特に、海外からのゲストに積極的に話しかけ、今回培ったコミュニケーション力を実践したいと考えています。また、この経験を一つのゴールではなく通過点ととらえ、今後も日英カフェや海外交流プログラムなどに積極的に参加し、多文化理解を深めながら、英語という異文化をつなぐ手段をさらに磨いていきたいです。



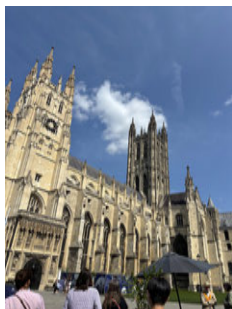
ケント大学語学研修体験記

日本大学文理学部英文学科3年 牛山 弥月

私は夏休みに、英語力を向上させ、ネイティブスピーカーとの会話の機会を増やしたいと思い、イギリス・カンタベリーにあるケント大学で2週間の語学研修に参加しました。初めての海外で不安もありましたが、募っている先生方の引率があり、安心して参加を決めることが出来ました。参加者は全部で25人で、他学科の学生もいました。普段の生活では他学科の学生と交流する機会は少ないので、とても良い機会になりました。宿泊はシェアハウスのような学生寮で、4~5人で共同生活を送りました。大学の敷地はとても広く、自然で溢れており、ウサギやリス、ハリネズミなどの小動物やきのこがたくさん見ることが出来ました。大学内にはカフェやバーなどがあり、食事は

カフェや食堂が利用でき、夜には先生方とお酒を飲みながら話しました。

授業は2つのクラスに分かれて行われ、すべて英語で進められました。座学だけでなく、イギリスのクイズ番組を模したゲーム形式や、イギリスの文化や歴史を用いた劇を行い、実践的に語彙や文法を学ぶ授業もありました。ペア



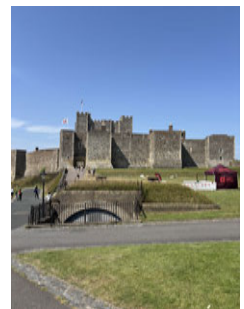
ワークやグループワークが多く、最初は緊張しましたが、積極的に参加することで、自分の拙い英語が伝わった時に、嬉しく、楽しくなっていました。授業では特に、イギリス特有の発音に苦労しました。たとえば「birth」という単語は、日本で習った通りに「r」を意識して発音すると通じず、むしろ伸ばすように「バース」と言う方が理解してもらえたのです。イギリス英語ではrの発音が異なることは聞いたことがありましたが、この違いを実際に体験できたのは大きな収穫でした。

相手が話していることが聞き取れず恥ずかしかったり、自分の英語が伝わらないことが不安で曖昧な返事をしてしまうこともありましたが、先生や学生アンバサダーとの会話を通じて、聞き返したり、ゆっくり話してもらったり、知っている単語を組み合わせるとにかく伝える姿勢が大切だと気付く事が出来ました。

授業の一環としてカンタベリー市内やドーバー城、ウィスタブルへ行きました。学生アンバサダーが同行してくれる時は、積極的に話しかける事で会話の機会が圧倒的に増え、イギリスの文化を教えてもらう事も出来ました。カンタベリー大聖堂をガイド付きで見学したり、川で船に乗ったりして歴史と街並みを堪能しました。ドーバーは、私が2年次の英米文学演習で習った*Never Let Me Go*という作品の舞台となった場所で、ドーバー城を訪れたことで物語の風景が鮮明になった気がしました。ウィスタブルは港町で、海に飛び込む学生もいました。なんと、先生も海で泳いでいました。その後は友人らと海を見ながらフィッシュアンドチップスやチキンを食べました。先生は生牡蠣を食べていました。食文化も体験でき、とても楽しかったです。

放課後や週末には友人とカンタベリーやロンドンに出かけました。行きたい場所へどうやって行くか計画を立てる事はとても大変でしたが、歩きながら街並みを見る事も楽しめました。ロンドンではパレスチナに関するデモに遭遇しました。バスを待っていたら、地元の人が「バスはデモで遅れているよ」と教えてくれました。大規模なデモを初めて実際に見ましたが、世界平和を願うのは共通なのだ実感し、身の引き締まる感じがしました。

また、留学中に誕生日の友達のお祝いをした際は、スーパーで食材を買い、ケーキ屋でケーキを調達しましたが、私が袋を持っていない事に気付いた店員さんが、大きなエコバッグを差し出してくれたこともあり、心がほっこりとする出来事もありました。現地の人々は思ったよりも親切で、安心して過ごすことがで



きました。

2週間という短い期間でしたが、英語を学ぶだけでなく実際に使うことで、英語力と積極性を鍛えることができました。学生アンバサダーとはお互いの国の文化を紹介し合い、友人たちとも深い絆を築きました。恥ずかしさを乗り越えて話しかけることで得られた経験は、今後の学びや人生に必ず活かせると感じています。ケント大学で過ごした時間は、私にとってかけがえのない宝物になりました。



《新刊書案内》

『人種と民族を考える十二章—英米文学・文化・教育の視点から』 (音羽書房鶴見書店、2025年)

日本大学文理学部教授 関田 朋子

『人種と民族を考える十二章』の趣旨について、編著者である吉田一穂氏は「移民問題がしばしば取沙汰される世界情勢の中、英米文学・文化、言語教育の視点から人種・民族を考察することにより、多文化主義や共生を考えるきっかけとなるような論集を作ること」(vii)であると述べている。本書は、このような趣旨に賛同した十二人の著者がそれぞれ執筆した十二の章から構成され、人種と民族をめぐる問題を文学・文化・教育という複数のレンズから多角的に捉え直そうとする論集である。編著者の吉田一穂氏、藤原愛氏、横山孝一氏をはじめ、日本大学英文学会の会員としては高坂徳子氏と私(関田)を含む執筆者が、イギリス文学・文化、アメリカ文学・文化、そして言語教育という三つの領域において、歴史的・社会的に形作られてきた人種や民族の表象を読み解く。

本書は三部構成で、第一部「イギリス文学・文化」では、『ヴェニス商人』や『オリヴァー・ツイスト』に見られる反ユダヤ主義や、ユグノー移民がイングランド社会に同化する過程においてギヤスケルやライザ・ミーティヤードといったユニテリアン派の作家が描くその文学的表象、フォースターの短篇「あときの船」における身体性をめぐる人種主義の表れなどが考察され、近代イギリス社会が抱える差別構造を浮かび上がらせている。第二部「アメリカ文学・文化」では、奴隷制と黒人解放運動の歴史的背景を踏まえた『アンクル・トムの小屋』や『ハックルベリー・フィン』における人種表象、スタインバックが描く人種のつばアメリカ、公民権運動の指導者キング牧師を支えたアフリカ系アメリカ人の宗教文化的要素、さらには「アメリカ人」概念の変遷や貧困白人の表象などが取り上げられる。第三部「言語教育」では、朝鮮語の歴史と日本の言語政策、また外国語学習者の立場から国家・言語・外国人を考察する章が収録され、日本社会と教育現場に直接つながる視点を提供している。

本書の特徴は、単に人種や民族に関する「問題」を切り出すのではなく、文学や文化の具体的なテキストを通じて、それらがいかに語られ、制度化され、また

抵抗や共生の可能性を孕んできたかを示している点にある。本書を読むことが、社会の偏見や抑圧の歴史を理解する手がかりになると同時に、他者とともに生きるための想像力を育む営みとなることを願っている。言い換えれば、本書がそのような「共生の想像力」を培う場を提供しており、読者に多文化社会を生きる上での視野を広げる契機となることを、著者の一人として願ってやまない。



2025年9月30日に、本学教授牧野理英先生が翻訳された『ラフカディオ・ハーンとピエール・ロティの見た「日本」』(小鳥遊書房)が出版されました。是非、お手にとりご覧ください。



《年次大会プログラム》

日本大学英文学会 2025年度 学術研究発表会・総会

日時：12月20日(土) 13:30より
場所：日本大学文理学部3号館4階3405教室

会長挨拶：一條 祐哉(文理学部教授)

学術研究発表会：13:35～17:00

●文学の部：13:35～14:55

[司会] 福島 昇(文理学部講師)
[発表] 1.堀切 大史(文理学部准教授)
2.松山 博樹(法学部教授)

休憩：14:55～15:10(15分間)

●語学の部：15:10～17:00

[司会] 秋葉 倫史(スポーツ科学部准教授)
[発表] 高橋 洋平(文理学部准教授)
[最終講義] 保坂 道雄(文理学部教授)

休憩：17:00～17:10(10分間)

総会：17:10～17:40

[司会] 黒滝 真理子(法学部教授)
[会長挨拶] 一條 祐哉(文理学部教授)
[会務報告] 天海 希菜(文理学部助手)
[会計報告] 飯田 啓治朗(文理学部教授)
[会則改定]
[その他]

懇親会：18:00～20:00 カフェテリア秋桜にて

司会 吉良 文孝(文理学部講師)
懇親会費 研究会員：5,000円
学生会員・大学院生：2,000円
同窓会員：無料

※懇親会に参加予定の方は12月12日(金)までに右記QRコードより必要事項をご入力の上、15頁に記載されているゆうちょ銀行の口座へ懇親会費をお振込みください。



《年次大会発表要旨》

ファンタジーという名の教育

—『オズの魔法使い』と新たな楽園の創造—

日本大学文理学部准教授 堀切 大史

アダムとイヴが神に背いたことによりエデンの園という楽園を失って以来、楽園という概念は、古今東西の芸術作品においてさまざまな形で描かれてきた。それは例えば、英国の詩人ジョン・ミルトンによる楽園文学の正典ともいべき叙事詩『楽園の喪失』が、英国国教会を清めようとしたピューリタンたちによる宗教改革運動を背景としていたように、それぞれの国や時代における社会的な状況が反映された形で描かれ

てきたと言える。そしてまた、現実の世界とは異なる想像の世界という意味で、楽園は、ファンタジーというジャンルの形をとって描かれてきたとも言える。例えば、アニメーション映画やディズニーランドをとおして世界中の人々にとっての楽園となっているウォルト・ディズニーの世界は、現代においては、もはやファンタジーの代名詞とすらなっていると言える。ミルトンの『楽園の喪失』からディズニーのファンタジーへといたるさまざまな芸術作品において、楽園の概念が再創造されてきた背景には、当然のことながら、現実の世界に満足できない人が多くいたり、楽園を必要としないほど現実の世界に満足している人が少なかったりすることがあるわけだが、現実の世界と異なっていれば何でもよいわけではないという意味で、楽園の世界が必要とされてきたのは、「現実の世界」対「想像の世界」という二項対立的な問題を解決することだけが理由であるようには思えない。そこには、そのような二項対立的な問題とは別の、積極的な

意味で現実の世界を生きていくために必要な、いわゆる「人生の教科書」となるような何かがあるはずなのだ。そして、そのよい例となるであろう作品が、ミルトンの『楽園の喪失』という楽園文学の正典を継承しつつ、ディズニーのファンタジーへとつながる作品となっている。ウォルト・ディズニーの先達ともいべきライマン・フランク・ボームによるアメリカのファンタジー小説『オズの魔法使い』である。ボームは序文において、『オズの魔法使い』を、「新しい不思議物語」と呼んでいる。そしてそれは、どうやら、教育の問題と関連しているようである。楽園とファンタジーの関連性を探りながら『オズの魔法使い』という「新しい不思議物語」について考察したい。

ことを明らかにする点にある。その脆さは、制度的基盤の不安定さ、社会的信頼の断絶、そして心理的欲望の暴走といった多様な要素の交錯から生じるものである。結論部では、このような分析を現代社会に引き寄せ、権力の成立条件と限界に関する普遍的な示唆を提示したい。



セット形成による構造構築の可能性： 制限的關係節を事例に

日本大学文理学部准教授 高橋 洋平

権力の限界—個人・社会・ 倫理の交錯する場としての シェイクスピア劇

日本大学法学部教授 松山 博樹

本発表は、ウィリアム・シェイクスピアの劇作品における「権力の崩壊」という主題を検討対象とする。取り上げるのは『リア王』と『リチャード三世』という二つの作品であり、両者は構造や人物像において大きな相違を示しながらも、いずれも権力が内部から揺らぎ、最終的に維持不能となる過程を描き出している。この比較を通じて、シェイクスピアが提示した権力の脆弱性と、その普遍的意味を浮かび上がらせたい。

考察にあたっては、既存の政治思想史的研究や心理学的解釈を参照しつつ、それらを単に並置するのではなく、多層的かつ相補的に組み合わせることを重視する。具体的には、権力の二重性をめぐる視点、社会的関係の脆弱性を示す視点、そして個人の内面的葛藤に注目する視点を織り交ぜ、それぞれが互いを補完し合う理論的枠組みとして構築する。これにより、シェイクスピア劇における権力崩壊を、部分的説明にとどまらず、総合的かつ説得力のある形で浮かび上がらせたい。さらに、権力の崩壊が単に制度の問題や心理の問題として理解されるのではなく、両者が交錯し、相互に作用し合う動態として捉えられる点を明確化することを意図している。

本発表の目的は、二作品を比較することで、シェイクスピアが単に王権の失敗を劇的に表現したにとどまらず、権力そのものが抱える構造的な脆さを描き出した

Chomsky (2024) において、人間の思考を階層的な言語システムによって生成する I 言語の基礎的性質として、「すべての構造関係および構造構築操作は思考と関係しており、概念意図システムで解釈される意味的性質を伴う」と定義する原理 T (Principle T) が提唱された。その帰結として、言語表現を生成する基礎的な構造構築操作である併合 (Merge)、および併合によって構築された統語構造は、その都度 Θ 理論と作用しながら思考と関係づけられた意味解釈を持つことが示唆される。

近年の論考では、構造構築操作とは本質的に言語体から集合を形成するセット形成 (Form Set) であり、これに二進性や Θ 理論が課せられることで、従来想定されてきた併合に相当すると考えられている。したがって、上述の原理 T が支持されるのであれば、セット形成およびその適用によって形成される構造についても、思考と関連した意味的性質を伴うことが予測される。しかし現時点での検証はリスト構文 (list-construction) に限定されており、十分とは言いがたい。

そこで本発表では、このセット形成による統語派生のさらなる可能性について、高橋 (2023) および Takahashi (2022, 2024a, 2024b) の一連の論考に基づき検討を行う。具体的には、一致分析と繰上げ分析の競合を許容する見解が依然として優位である関係節構文を取り上げ、効率性に代表される第三の要因を遵守したセット形成による関係節主要部と関係節 CP の構造構築案を提示する。これにより、関係節内外に偏在する関係節主要部のコピー認定や、繰上げ分析が直面する不適切移動 (Improper Movement) の回避に対して、自然な説明が与えられることを主張する。



〈最終講義〉

文法化研究と私：木を見て 森を見る研究をめざして

日本大学文理学部教授 保坂 道雄

英語の文法化現象に取り組んで約30年、文法化研究の重要性を近年あらためて感じている。本講義では、「文法化とは何か」を出発点に、その実証的及び理論的研究の側面を概観しながら、「文法化 (Grammaticalization)」についての本質的な議論を深めて行きたい。

まず手始めに、中高の授業でも扱われる英文法の多くの現象（冠詞、接続詞、関係詞、助動詞、進行形、完了形等）が、英語の通時的過程の中で生じた文法化の結果であることを観察し、そこには共通するメカニズムが存在することを確認する。具体的には、冠詞の存在意義や進行形のbe動詞や完了形のhave動詞の起源、助動詞doの出現などを取り上げ、英文法の主要な要素がどのような過程を経て現代の姿になったのかを考察する。

また、こうした文法化現象は近年の生成文法や認知言語学の研究においても主要なテーマとして取り上げられているが、その議論には相容れない部分があり、こうした両言語理論による説明は実はコインの表と裏の関係にあることも論じる。言語には「思考の言語」と「伝達の言語」という2つの側面があり、前者に焦点をあてる生成文法と後者を重視する認知言語学との視点の違いである。しかしながら両側面が言語の総体を形作っている点が重要であり、両言語理論の接点を探る。さらに、「ことばの進化」の視座からも、文法化はその中心的役割を果たしており、文法化を経ることにより文法を有する人間言語が誕生したとも言える。

なお、こうした研究を遂行するためには、地道な言語資料分析と言語を俯瞰的に見る研究の融合（「木を見て森を見る研究」）が必要であり、こうした文法化研究が新たな言語研究の発展の契機になればと願うものである。



《月例会関連》

●月例会予定

2025年度11月以降の行事予定は以下のとおりです。詳細が決まり次第、メールおよび、本学会ホームページにてご案内いたします。

11月 研究発表（2025年11月22日）

司会 高橋 利明（文理学部特任教授）
発表

1. 「バトルビー」の受容の政治性—冷戦から Occupy Wall Street まで
笠根 唯（富山大学講師）
2. 英語学習エンゲージメントの向上を目指した日韓交流型教育プログラムの構築
久井田 直之（経済学部准教授）

12月 2025年度学術研究発表会・総会（2025年12月20日）

詳細は《年次大会プログラム》をご覧ください。

※懇親会に参加予定の方は12月12日（金）までに12頁のQRコードより必要事項をご入力の上、本頁下部に記載されているゆうちょ銀行の口座へ懇親会費をお振込みください。

《訃報》

誠に残念なお知らせですが、7月17日に工藤由布子先生（危機管理学部専任講師）が逝去されました（享年51歳）。また10月24日に梅下新介先生（スポーツ科学部専任講師）が逝去されました（享年52歳）。謹んでお悔やみ申し上げます。

《事務局だより》

●卒業された同窓会員の皆様へ

日本大学英文学会では、会員・非会員にかかわらず、卒業後は同窓生として英文学科全卒業生の個人情報とを保管しております。住所変更など、ご登録情報に変更がございましたら、学会通信目次に記載されている宛先までお知らせください。

また12月20日の年次大会後に開催される懇親会では同窓会員を無料で招待しておりますので、ぜひご参加ください。

●会費納入のお願い

2025年度学会費（研究会員4,000円、同窓会員1,000円）を同封の郵便振込で納入くださいますようお願いいたします。なお年次大会受付を含む事務局での現金による学会費納入はお取扱いきません。学会費納入には、お手数ですが、郵便振込をご利用いただきますようお願い申し上げます。

口座番号：00140-3-27474

加入者名：日本大学英文学会

店名：〇一九

※日本大学英文学会会則により、年度末時点で3年間会費未納の場合には自動的に退会となります。

●研究発表者募集

当学会では、次年度の月例会（シンポジウムを含む）・年次大会の発表者を募集しております。発表をご希望の方は、以下の情報を事務局までお寄せください。なお、検討の結果、ご希望に添えない場合がございます。予めご了承ください。

1. 氏名
2. 住所・電話番号・メールアドレス
3. 所属
4. 発表希望年月
5. 発表題目
6. 要旨（日本語400字以内、英語200語以内）

●『英文学論叢』第74巻英文学科創設100周年記念論文集の原稿募集

日本大学英文学会機関誌『英文学論叢』第74巻 英文学科創設100周年記念論文集（2026年秋発行予定）の原稿を募集いたします。今回は投稿締切日を「2026年1月31日」といたします。100周年記念に相応しい立派な記念論文集を刊行したいと存じます。論文の投稿、ならびに他の会員の先生方へもお声がけいただけると幸いです。投稿をご希望の方は、『英文学論叢』第73巻（2025年3月発行）巻末の投稿規定をご覧ください。

●学生編集委員

| | | |
|---------|----|-------|
| 英文学科 | 3年 | 三浦 結介 |
| 英文学科 | 4年 | 横田 涼 |
| 大学院前期課程 | 1年 | 佐々木耀大 |
| 大学院前期課程 | 1年 | 藤原 陸 |

発行：日本大学英文学会

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部英文学研究室内

Tel. : 03-5317-9709

E-mail : esanu02@gmail.com